令和元年度　横浜市世界を目指す若者応援事業

（個人留学による帰国報告）

●氏名

A.K さん

●留学先

国/都市：イタリア/Melzo

外国の高校：Giorando Bruno

●留学期間

2019 年9月３日～2020 年３月１３日

●留学先での活動、留学で学んだこと

私は 2019 年9月から 2020 年１月まで、イタリアミラノのやや右側に位置するメルツォという町に交換留学をしました。本来であれば、10 か月の予定でしたが、世界的にパンデミックになっている新型コロナウィルスの影響で急遽帰国することとなりました。今までの６か月のイタリア生活について感じたこと、変化、習得したこと等を報告します。

私は、小中学校を中華学校で過ごし中国文化を習得してきました。また高校では将来、スポーツに携わっていきたいという思いからスポーツマネジメント科に入りました。異文化とスポーツに関心があることから、日本以外の国の人たちのスポーツに対する考え方だとか、取り組み方などを直接感じたいということから、スポーツが盛んなイタリアを選択し、６か月間、イタリアの家庭にホームスティをしながら学校に通い、バスケットチームに所属し現地の人と同じ生活をしてきました。

まず、イタリアのホスト家族は、自営業で忙しく仕事をしているが、イベント事には積極的に行動し楽しんでくれる父、手先が器用で料理も絵を描くことも歌を歌うことも上手で昔歌手だった母、そして私より一つ年下で自然に音楽に合わせてダンスをしたり、何事も積極的にチャレンジする私と姉妹になってくれたホストです。イタリア人は家族を大切にすると聞いていたとおり、私のことを本当の娘のように愛してくれて毎日寂しいことなどなく生活ができました。

イタリアに行く前はイタリア語が話せるわけではなく、イタリア人を知っていたわけでもなく、ただ基本的な挨拶や数字や簡単な単語のみしかわからない状況でした。そんな私を空港で待っていてくれて対面した時にはイタリア人らしく、一番に熱く抱きしめてくれました。今でも忘れられないです。日本人はシャイなとこもあり、ハグすることもありません。でもこのハグやイタリアで習慣であるバーチョ（ビズ）のようなスキンシップは、心のコミュニケーションがとれ、不安な心を払しょくしてくれる良い習慣だと私は感じま

した。私の妹とは毎日バーチョし、父や母やホスト、友達とも自然にバーチョすることができました。

ー学校ー

　イタリアに着いて翌週には学校が始まりました。イタリアの学校は、日本みたいにホームルームや部活動などはなく午前中授業で終わり、生徒は家に帰りお昼を食べます。イタリアでは学校からの連絡事項、クラスでやらなければいけないことなどを学級委員の人たちがすべて管理をしています。提出物は期限までに全員分集め、担任の先生に渡したり、行事のお金やクラス費などを全部管理して先生に提出します。日本ではない光景だと思いました。授業は日本みたいに先生たちが移動します。先生は自分の授業が始まる時間にくるので一時間目からない時もあります。２時間目と３時間目の間には「Interballo（休み時間）」があり、みんなでお菓子を食べます。学校には BAR があり生徒はパンを予約していたり、先生たちもコーヒーを飲んだりしています。お菓子を食べながら友達と外や廊下を歩き回ることもあります。休み時間の過ごし方も日本とは少し違い、コミュニケーションをとることを大切にする国だと感じました。週に二回、先生が来たばかりの子や会話はできるけどまだ授業は難しいという子のために補習（イタリア語のレッスン）をしてくれました。先生たちも私のことを気にかけてくれ、授業の始まりに、イタリア語はどう？慣れた？などいろいろ聞いてくれてとても親身になってくれました。私のクラスは男女関係なく、みんなが仲良く毎日笑いで溢れていたクラスでした。私はクラスメイトの子たちと沢山コミュニケーションをとりたいと思い、自ら沢山話しかけに行ったら、みんな私に一生懸命応えてくれました。また私のイタリア語の成長も気づいてくれてほめてくれました。クラスの中には一人中国人の子がいました。私はその中国の子に分からないところを聞いたり、テストの時にも助けられたり彼女がいたからこそイタリア語の習得はかなり早くできたと思っています。私の通っていた学校は宿題も多く、勉強のできる学生が多かったが私はそこについていこうと必死に勉強しました。私が中国語を学んでいたことが役立ち、相手の母国語で話すことができる言葉の強さを強く実感しました。また、ホスト家族も間違った文法は何度も何度も間違いを指摘してくれて、使い方、活用など教えるのも大変だったと思うけど、私のイタリア語の成長を思い常に教えてくれました。また、家では週末には家族でよく映画を見ました。映画からもたくさんのイタリア語を聞き、帰国するころには、イタリア語で聞く映画もほぼ理解できるようになりました。私のイタリア語の文法は違うものもあるかもしれないけれど、会話はもちろんのこと、聞きとり、理解はできるようになりました。たった半年でしたが、環境を作ってくれたホスト家族には感謝しきれないほどの思いです。

ースポーツ

　私は、ホストが入っていたバスケットのクラブチームに入りました。どんな練習をするのか、どんなプレイをするのか、監督はどんな指示を出すのかすごく興味がありました。

やはり日本とは違う光景がありました。チームでの競技では日本は強いとされている意味を実感しました。イタリアでは個人の強さを強調します。ボールを受け取ると、自分でゴールに入れたい！自分がプレイをしたい！自分が動いている状況を回りが見ながらパスを待つようなプレイが多くみられました。日本は色んなパターンのフォーメーションを練習し、状況を見ながら司令塔が周りに指示を出す。また。ボールを持った人は、どのポジションの人が今どこにいるのかを把握し、相手の動きも見ながらボールをパスする。まさにチームで動く。これが日本の強さなのかなと感じました。私は日本でのプレイをイタリアでも実行しました。すると、監督は私の動きをみて練習に取り入れてくれるようになりました。こういったプレイの違いも体験できたことは大きかったです。また、日本の部活ではボールで練習する前に、持久力、体力を強化するために走りこんだり、柔軟をしたり、その時間を多くとります。しかし、イタリアではそういった練習はなく、とにかくバスケをしていました。そういったことも日本との違いを感じました。日本は決まった内容をとことん練習し、蓄積し強くなるが、練習どおりにできないと反省し、また練習するのに対し、イタリアでは自分の個性を表に出し、その個性を互いにとても大事にできるので、とっさの行動にも柔軟に対応できるイタリア人。そこがイタリア人の良いところでもあると感じました。

　また、父がイタリアの女子バレーボール代表のスポンサーということもあり、スポンサーの集まるパーティーに行くことができました。オリンピックに出る予定の女子バレーボールを間近で見れたことは、感動と興奮でいっぱいでした。行ったときはまだイタリア語がたくさん話せる時期ではなかったので、自分から話しかけたり質問したりすることができず、写真を撮ることが精いっぱいでしたが、そこから感じるオーラはすごく輝いていました。春にはバレーボールを応援する機会もあったのですが、その前の帰国ということで一度もその選手の応援に行くことができませんでした。とても悔しいです。でも日本でもこういった機会はないので、こういったパーティーに行かせてくれたことはとても光栄でした。

　イタリアに行って感じたことは、自ら行動すること、自分からいろんなことに興味を持って積極的にやることによって、相手も興味を持ってくれて会話が増え、より一緒にいろんなことができること。また、目の前の人一人一人とちゃんと向き合って大事にすることが大事だと思いました。また、輪の広がりや人の器の大きさを実感しました。

　イタリアではまだやりたかったこととやり残したこと、最後にみんなとちゃんとお別れができなかった事、もっとイタリア語はできるようになりたかった事、急な出来事で沢山思うこと、いろいろな感情はあるけれど、この六か月はみんなに助けてもらい、いろんな人に支えてもらい、私の中でかけがえのない経験になりました。感謝でいっぱいです。イタリア語をもっとしゃべりたい、もっとうまくなりたいと思いました。

―今後の活かし方

　私はイタリアのコミュニケーションの習慣や考え方、言葉、スポーツへの取り組み方などたくさんのことを体験してきました。今後は全身全霊で経験してきたことを活かし、世界で活躍できるスポーツトレーナーを目指していきたいと思っています。